蝶々

きみよし藪太

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
蝶々

【Ｎコード】
Ｎ９８１２Ｌ

【作者名】
きみよし藪太

【あらすじ】
社会人の恋人と、女子高生のわたし。
あなたは本当にわたしのこと、好きなのかな。
そんなに好きじゃなくても、男の人ってキスできたりするんでしょう？

わたしの男は社会人で、そしていつもタイピン代わりにわたしの蝶々が付いたヘアピンをネクタイにつけている。水色の蝶々のと、黄色い蝶々のがあって、彼は赤いのもあればいいのにな、といつも言う。

「どうして？」

「お前には赤が似合うからさ」

彼は浮気者で、すぐに他の女と寝てしまう。眼鏡の奥の目がとてもクールで、いつも恰好良い。女が寄って来てしまうのは仕方がないけれど、わたしだけを見ていて欲しい夜だって、ある。

「何言ってんだよ、俺はお前だけだよ、」

タイピン代わりの蝶々は俺の愛の証だよ、と彼は真剣な顔をするから、本気なのならいいか、とわたしはすぐに納得してしまう。そういうのは、駄目なのかもしれないけれど。

女子高生っていうのはみんな援交してんのかと思った、と笑った彼が、わたしの記憶で一番古い彼だった。友達が幹事をしたコンパで、わたしと彼は出会った。

最初は、一回セックスできればいいや、とだけ思っていたのに、なんだかずるずると、わたしは彼を好きになりかけている。

彼はずるい。ネクタイの蝶々で、わたしを縛る。わたしの心を留めてしまう。悔しいぐらいに大好きで、そしてちょっとした事でわたしを幸せにしてしまう。

「なんだよ」

「え、なにが？」

「人の顔をじろじろと」

「ううん、恰好良いな、とか思って」

久しぶりのデートはスーツだった。仕事帰りだという彼は一番恰好良い。わたしは彼に対して「恰好良い」という感想しか持ってい

ないみたいだ。馬鹿みたいに、そればかりを繰り返して彼に言う。
「そんなん、当たり前じゃん」
「当たり前なの？」
「そだよ、お前は俺に惚れてるんだから、誰より俺が、お前の目には良く映るんだよ」
自惚れかと思ったら違っていたので、わたしは、ふうん、と頷いておいた。
「可愛い奴」
「えへ」
「バカだけどな」
「あ、ひどい」
バカな方が可愛いからいいんだよ、と丸め込まれて、わたしは頭をぐしゃぐしゃに撫でられる。それでも、夜の街を制服のまま彼と歩いていると、なんだか女王様になった気分になる。道行くＯＬっぽい女の人達が何人も振りかえる。彼は完璧、彼はものすごく恰好良い。
彼の短い髪を、わたしも撫で回したいのだけれど、背が高い彼にはわたしの手が届かない。ここでキスしたい、誰かの歌のように、と思ったけれど、結局恥ずかしくて出来なかった。天下無敵の女子高生だって、羞恥心のある人間もちゃんといるのだ、と前置きなしで威張ったら、彼は変な顔をしてなんだそりゃ、と言った。
彼の吸う、紺色のパッケージのタバコ。
わたしのカバンの中にも、封の切っていないそれが入っている。わたしは吸わない。ただ、彼と同じ物を持っていたい、それだけ。
「なに、そわそわして」
「え、わたしそわそわしてる？」
「してる。便所？」
「違うよ、なにそれ」
色気も何もない話し方しないでよ、と怒ってみせたら、子供が喚いてると彼が笑った。彼から見たら、わたしは子供で子供で仕方が

ないのかもしれない。
「なに、寒い？」
彼の腕がわたしの肩を抱いた。
そういう事をさりげなくしてしまう彼が、好きだ。
「どうしてわたしが好き？」
「今世紀最大の難しい質問だ、最大級の謎でもあるな」
「はぐらかしてる？」
「理由がないほど好きだって事だよ」
そんなのじゃ分からない、と素直に言うと、彼の足が止まった。
「どうしたの？」
そう聞くわたしの顔まで自分の顔を下げてきて、あ、と思ったら彼の唇がわたしに降った。
「え、ちょっ、」
くすぐったい勢いで、彼の唇はわたしの肌に押し当てられる。額に、瞼に、鼻先に、頬に、耳に、そして最後に唇に。温かな感触は、すぐに舌を割ってわたしの口の中へと侵入してきた。さっきは自分からキスしたいと思っていたくせに、みんなが見てるよと言いたくて、けれどもそんなくだらない事で口を開いたら彼はすぐにつまらなそうな顔になってくちづけを止めてしまうだろうという事も知っていたので、それに第一彼のキスに酔わないわたしなんてただの偽物だから、あっという間にそれに集中する。
「こういう事」
唇がくっついていたのはどれぐらいの時間だったのだろう。上手なキス、でもきっと彼の唇ならわたしはすべてに満足してしまう。
「好きでもない女とはキスしません」
「でも、嫌いじゃなければできるでしょ」
「お前、男心も案外乙女チックなのよ？」
「そうなの？」
「そうなの」
この人がわたし以外の人とキスしたことがないなんて思わない、

でも今、わたしとのキスが一番彼にとって楽しいものになってくれていればいいな、と、それだけを強く思う。
「わたし、キス好きなんだよ」
「知ってるよ、」
だからいつもしてやるじゃん、と言われて、わたしは目を細める。いつもしてもらってる。対等じゃない甘やかしが大好き、男女平等なんて大嫌い、わたしは甘くワガママに生きていきたい。なんて言っていると、ものすごく大きなため息を吐かれるかもしれないけれど。
「もしも、嫌いでなければ誰にでもキスできるような男心になっちゃっても、他の人にはしないでね」
「お前が見てなくても？」
「見てないところなら良いっていうのは変よ、変、駄目」
「お前がいつか俺を捨てちゃった時でも？」
いつか捨てられるとしたら、それはきっとこっちの方だと思うのだけれど、と、わたしは言わないでおいた。言葉に出すと、本当になっちゃいそうで怖いから。
「捨てない、絶対捨てないから大丈夫」
「絶対なんて言い切るなよ、先は分かんないぞ」
「分かるもん、絶対、絶対わたしはずっと好きだもん」
彼のネクタイにわたしの蝶々がとまり続けるように、わたしの心にもあなたが居続ける未来。
帰りに赤い蝶々を買ってやろうと彼が言うので、背の高いその顔を見上げると、なぜかいつもより赤くなっているように見えた。わたしの言葉が嬉しかったのかな、言葉なんて不確かだけれどこんなにも人を幸せにするんだ、と思ったら、わたしもすごく嬉しくなってしまって、彼の手をぎゅっと握って、大好きよ、と言ってみた。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n9812l/

蝶々

2010年10月8日14時41分発行